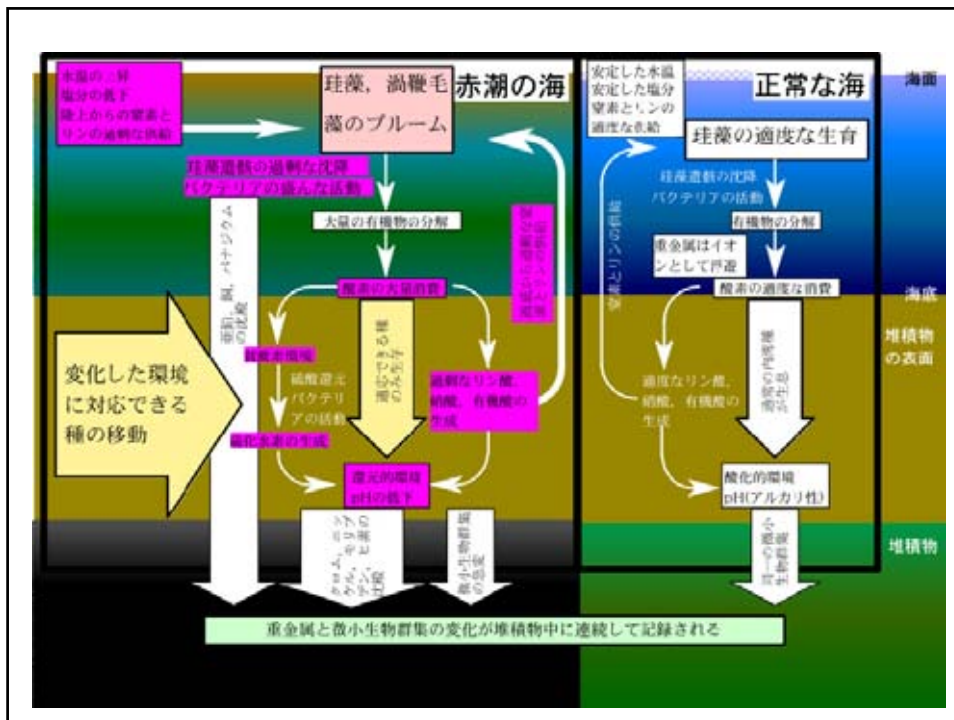


## 底質の変化に関するこれまでの論点

～ 第12回評価委員会資料より～

### 2. 底質の変化

問題の概況	原因・要因として指摘されている事項	論点、課題
<p>&lt;有明海&gt;</p> <p>底質の細粒化・泥化の傾向がある。(湾奥部、湾中央部、筑後川沖、熊本沖・津島沖(横島沖～白川・緑川沖)、諫早湾など)〔瀧川委員〕</p> <p>湾奥西側、熊本沖等では、底質のCOD、硫化水素、強熱減量が増加している。〔瀧川委員〕</p> <p>&lt;「底質の細粒化」には粒径が小さくなっている場合と有機物が増加している場合がある〔楠田委員〕&gt;</p>	<p>河川の海浜影響〔瀧川委員、菊池委員〕(ダム、河口堰等)〔菊池委員〕</p> <p>海の静穏化〔瀧川委員〕</p> <p>底生生物の減少に伴う生物攪乱の低下〔瀧川委員〕</p> <p>潮流の減少</p> <p>航路浚渫、海砂採取〔清野委員〕</p> <p>河川流入水と潮流と浮泥との相互作用〔瀧川委員〕</p> <p><b>底質の有機物・硫化物の増加</b></p>	<p>①底質の変化に大きな影響を及ぼしている原因は何か。</p> <p>②河川からの土砂の流入はどのように変化してきているか。</p> <p>泥化は以前より進行(堆積速度・シストの変化)変化・減少の激しい場所に影響</p> <p>海域全体の底質変化と結びつけにくい現状</p>
<p>&lt;八代海&gt;</p> <p>底質の強熱減量と硫化物は、特に増加する傾向はみられない。</p> <p>養殖漁場の底質は、CODは1995年がピークで以降減少、硫化物は1987年頃がピークで以降減少又は横ばい。</p>		



## 再生策の提案……(留意点(d))

### 改善への処方箋

基本的には

1. 「人為的インパクトの低減」
2. 自然環境の回復能力の再生、特に「干潟環境の回復と創造」
3. 河川水を含めた「水質の改善」 (負荷削減、流況改善、水質浄化)

自然のおよび人為的インパクト:

#### 自然的インパクト:

地球温暖化、外海水の流入、台風にともなう高潮・高波、大雨に伴う河川水・土砂の流入、海底陥没等による干潟の減少、地形(干潟地形)の変化など

#### 人為的インパクト

公共施設の建設、漁業・養殖業を含む各種の産業活動、内陸の都市化等にともなう負荷の量と質の変化など(特に、海岸における「なぎさ線」の喪失、干潟の消失、環境汚染物質の流入と蓄積、陸域からの栄養物質の負荷、ノリ養殖における酸処理剤の使用や施肥、砂利採取による海底地形変化など)

# 底質改善について

**悪化の著しい**：底質環境の改善(持続的改善策)に注目

## ・浮泥源への対策

栄養塩負荷の削減・栄養塩沈降物の除去・流況改善(流れ・乱れ)など

## ・泥化し有機物・硫化物の蓄積した底質改善

好気的環境の創出(好気微生物活性)・バイオターベーション・浚渫  
耕耘・覆砂・海底攪拌 など

## ・喪失された「なぎさ線」の回復

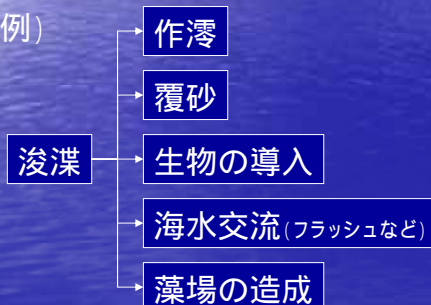
連続した地形・生態系の連続

# 複合・管理型工法

## < 理論 >

前述のような改善工法はそれぞれ独立して行なうことも可能であるが、定期的な維持管理を念頭に置き、複合して実施することによって、目的に応じた海域環境を改善させ、その効果を持続させる。

例)



## 定期管理

攪拌(耕耘)

海水交流(マイクロバブルなど)

化学的手法

その他の手法

48